

発のニュースは瞬時に広がった。ドイツでも、被災者の映像・発言がそのまま放映されたのだろう。まさに「声が聞こえる」である。上二句、しゃべり言葉をそのまま活かした工夫。

ぬ 勞ひに涙のみ出づ戦きぬし事は悪夢なり大地震すぎ  
田中江子

作者は茨城県高萩在住。ずいぶん揺れたらしい。高齢の夫君とお二人の住まいらしい。余震、停電等のなかで不安な時間をすごされたのだと思う。今月の作のなかに、「生き得たり七日ぶりなり吾が家の風呂に謝しつつ五体を伸ばす」ともあった。

田中江子さんは夫君・長三氏とともに、現在の「心の花」の最も古くからの会員の一人である。

避難所のおほいなる闇 百三十の寝息のひくくひくくみちたる  
本田一弘

同時作に「学校が避難所となる体育館に敷きつめらるる段ボール段ボール」という作がある。福島県の勤務先の学校が避難所となつて、同僚の教員とともに、避難所の準備、運営にあつたのだらう。震災当日の夜だらうか、興奮で寝付かれない人もいただらうが、深い疲労で熟睡した人も多かつたはず。

苦心の「おほいなる闇」、そして「百三十の寝息のひくくひくくみちたる」が表現する震災の夜の避難所の空気を読みとりたい。

母の死を知る瞬間の映像に被災の少年その頬白し

越智敦子

テレビ映像に取材した歌にするのは難しい。自分ではなく、カメラマンが選んだ場面だからだ。用語や言い回しに特色を出すとか、画面の細部にこだわるとかの工夫で勝負しなければ、うまくゆかない。この歌「頬白し」がかるうじて独自性をだしているようだ。ただし、「その」はいかが。

花時の上野西洋美術館レンブラントが覗し闇を見に  
ゆく 齋藤佐知子

思い切つて「闇を見にゆく」と表現したところがポイント。絵画展の歌として独特。「覗し」は「見し」でよかつたか。

どことなく嘘っぽい日が暮れてゆきずると脱ぐ  
青い靴下 上原良美

「何となくいんちきっぽい朝がきてごそごそと履く赤い靴下」と対で、二首一組の連作。アンニュイな空気とともども、なかなかいい。

泥の田に踏ん張り立ちて連根引く屈める背の背筋動  
く 松田英美

後ろから見た働く男を描写して的確。働く人物の存在感がみごとに表現されている。

十年振りに一家六人横並びにて撮れば我ははみ出て  
いたり 久松洋一

この作者独特のずっこけの歌で、句またがりの不思議なりズムが内容にふさわしいようだ。